

＜連合会設立＞

提案：「富山県民をメタボにしないキャンペーン」を始めませんか？

07年10月6日、富山大学同窓会連合会が発足した。その2年前の05年10月に、富山大・医薬大・高岡短大が統合される形で、8学部を擁する総合大学になったわけだが、それぞれの学部ごとに活動していた同窓会も統合し、大学を盛り立てていこうという趣旨である。大学の統合自体は私立大学のケースと違って、自らのニーズと意志で実行したというよりは、国の法人化（再編・統合により運営の効率化をはかる大方針）にしたがって行われたわけだが、同窓会の方は自らの意志で統合したことであり意義深いと思う。

それでは、同窓会は何を支援すればいいのだろうか。私は薬窓会の立場なので、やはり「富山県民の健康生活推進活動」を支援したいと思う。世には「メタボ」という用語が飛び交い、これまでの「成人病」に代わって「生活習慣病」という誰にも理解できるネーミング（聖路加の日野原重明先生の命名という）がなされている。広く捉えると、多くの病気が“好ましくない”生活習慣によって惹き起こされるのであり、死因第1位の「がん」すらも喫煙、肥満、飲酒などの生活習慣が重要なリスクとされる。第2位、第3位の脳卒中と心臓病を合わせると、いまや約60%の日本人は3大疾患で亡くなるのである。

それでは富山県は？というところ、ほぼ全国並み、脳卒中が少し高く、がんと心臓病は少し低い。過去50年間の県による生活習慣病予防対策は、がんに重点を置いた取り組みになっていて（富山県の生活習慣病予防対策のあゆみ：県資料）、脳卒中と心臓病に積極的な対策を打ってきたようには読み取れない。

そこで私の提案は、「同窓会連合会」企画・支援による『富山県民をメタボにしないキャンペーン』である。メタボとは、メタボリック・シンドローム（代謝症候群）のことだ。医学部があり、薬学部があり、和漢研があるのだから、とっておきの特別企画を考案することは簡単である。たとえば、きめ細かい県民講演会（医師、薬剤師、看護師の同窓生連携。中規模の病院や公民館などでは機会をとらえて開催し、県民・市民の健康意識を高める）、自己診断（体重と腹囲、血圧ぐらいは自己測定）を含めた定期的な健康診断の励行…東北大の今井潤教授は、「血圧は家庭で測る方が正確で低い」と指摘している（高血圧の世界標準：135－85mmHgに採用された岩手県大迫町の研究）、児童・生徒への健康教育は人間発達科学部（教師）、医学部（学校医、養護教諭）、薬学部（学校薬剤師）が連携すれば難なく実行できる…私としては、授業に「薬の飲み方教室」をぜひ取り入れてほしい。“薬都富山”ならではの試みとなり、おそらく全

国で唯一。富山県人のみならず、日本人にとって必須の授業であると確信する。

すべてのベクトルを「健康推進」に向ければ、環境整備の方向も決まる。たとえば市内や市近郊の遊歩道や公園の整備（散歩の励行…主要施設への行先表示板や歩行距離が分かるような標識をさりげなく配置）、もちろん、市内レストランの食事メニューに塩分とカロリーを表示するのは当然であろう（商工会議所所属の経済学部同窓生の協力出番）。

富山県は主要疾病の死亡率全国比較ではちょうど『1%県』であるから、目標は立てやすいし、県民への説明も容易である。いくつかの支援具体例を示したが、同窓会がまとまれば大概のことは実現できる。目標をどの辺におくか、ここは知恵の要るところであるが、少なくとも『全国ベスト 10』に入るあたりを第一目標にしたい。すべての学部を網羅してはいないが、人文学部（薬都富山の健康意識に関する歴史的、社会的考察）、工学部（IT 機器やシステムを活用したアンケート調査の設計や解析）、理学部（生物、化学、環境からのアプローチ）、最後の芸術文化学部はまさしくプロデューサーを引き受けてほしい。名プロデューサーなくしては、すべての文化活動は円滑に進まないのが世の中の通例だ。

（柿崎直和 55 回 記）